

グスタフ・マーラー時代のトロンボーン使用史 ～1832-1911～

『Gustav Mahler – Musikinstrumente und Musizierpraxis: Posaunen』 (Gerhard Zechmeister著)

【目次】

- 1 はじめに
- 2 宮廷楽団 (Hofmusikkapelle) 時代 (1832-1858)
- 3 宮廷歌劇場 (Hofoper) 時代 (1855-1883)
- 4 スライド・トロンボーンの再導入 (1883)
- 5 再導入されたフランス調律 (1885-1886)
- 6 マーラー時代の演奏事情 (1901-1911)

1 はじめに

1832年4月3日、宮廷楽団のトロンボーン奏者レオポルト・ゼークナー(Leopold Seegner)は、2人の息子――ヨーゼフ (シュテファン教会、ショッテン教会、イエズス会教会で活動するトロンボーン奏者) およびモーリッツ (ウィーン劇場の首席トロンボーン奏者)――が、自ら考案した「発明的機構付きトロンボーン (InvenziionsMaschin Posaune)」を、皇帝の面前で演奏する許可を求めた。

そのわずか数日後、「一般劇場新聞 (Allgemeine Theaterzeitung)」は次のように報じた。1832年4月8日、音楽愛好協会 (Gesellschaft der Musikfreunde) のホールで行われた演奏会で、モーリッツ・ゼークナーは、自身の楽器に取り付けられた機構を用いて、多くの難しいパッセージを見事に演奏し、とりわけその楽器の力強い低音を示した、という。

2 宮廷楽団 (Hofmusikkapelle) 時代 (1832-1858)

1832年11月30日付の「皇帝の勅命 (a. h. Entschlieβung)」により、宮廷オペラ管弦楽団の首席トロンボーン奏者フランツ・ヘルベダー(Franz Hörbeder)が、宮廷楽団の見習い奏者 (Expektant: 無給の待機職) に任命される。この任命は、「高齢で虚弱になったトロンボーン奏者レオポルト・ゼークナーの代行を務めるため」とされている。

1834年10月10日、レオポルト・ゼークナーが死去。見習いであったヘルベダーは正式に有給職へと昇格する。宮廷楽団の団員たちが新しい楽器の導入を求めていたこともあり、1837年5月10日付の内示により、ウィーンの楽器製作家レオポルト・ウールマンから、調整管付きの「マシン・トロンボーン」の購入が許可される (図1を参照)。

「近年の教会音楽作品はより複雑かつ重厚な編成をとる傾向があり、3本のトロンボーンが必要とされることが多くなった」との理由で、1845年8月29日付の皇帝の決定により、ブルク劇場管弦楽団およびシュテファン大聖堂のトロンボーン奏者モーリッツ・ゼークナーが、宮廷楽団の「臨時」メンバ

ーとして迎え入れられる。

モーリッツ・ゼークナーは1847年3月14日、「新たに発明されたマシン付きトロンボーン」の購入を願ひ出る。その理由として、「宮廷楽団における度重なる補強演奏に際して、自分の楽器を自宅から持ち運ばねばならず不便である」と述べている。

レオポルト・ウールマンによる見積書によれば、それは「新しく改良された機構と調整管付きのトロンボーン」であった。宮内長官府は1847年4月9日、この購入を承認した。

1847年7月20日付の宮廷楽団の楽器目録には、2本のスライド・トロンボーンに加えて、「マシン付きテナー・トロンボーン」が記載されている。また、同年11月の特別支出項目には「新たに購入されたバス・トロンボーン」が記載されている。

1851年1月4日、宮廷楽長アスマイヤーは次のように報告している。「バス・トロンボーンは、現在すべてのオーケストラにとって不可欠な楽器であるにもかかわらず、宮廷楽団では見習い奏者によって無償で演奏されている。」

1851年8月27日、フランツ・ヘルペダーが死去し、それにより見習い奏者であったモーリッツ・ゼークナーが正式な有給職に昇格する。

3 宮廷歌劇場 (Hofoper) 時代 (1855–1883)

そして1855年9月1日、モーリッツ・ゼークナーは次のように訴える：

「拝啓、私（ゼークナー）は1854年1月2日、レオポルト・ウールマン氏に対し、同氏が宮廷楽団のために製作したトロンボーンの機構が不完全であることを理由に、改造を依頼しました。ウールマン氏は『旧来の不完全な機構の代わりに新しい機構をすぐに納品する』と約束しましたが、それから1年半以上が経過した今も納品はされていません。よって私は改めて、完全に機能する状態での納品を強く求めます。」

その訴えに応じて、宮廷楽長アスマイヤーは1855年9月、楽器製作者レオポルト・ウールマンに次のように依頼した。

「別の新しい機構（スライド式レバーによる従来型の円筒バルブ式）を製作すること。既存の機構は使用に耐えない。」

1857年1月28日、皇帝フランツ・ヨーゼフは、フランツ・ペックを新たな見習い奏者（Expektant）として任命することを承認した。

過去4年間、この見習い職には応募者が現れなかったため、必要に応じて、宮廷オペラ劇場（Hofoperntheater）のトロンボーン奏者フランツ・ペックを有償で臨時に雇用せざるを得なかったのである。

その後、ペックがバス・トロンボーンの支給を求めたことを受けて、1858年3月25日、宮廷楽長アスマイヤーは宮内長官府に次のように報告した：

「宮廷所有の楽器の中には、該当するトロンボーンが存在せず、しかも第3トロンボーンは頻繁に必要とされます。」

そのため、宮廷音楽局は次の楽器の購入を要請した：

「4バルブ付き、交換可能な2つのベルを持つバス＝テナー・トロンボーン」

このトロンボーンは、1858年3月26日付の宮内長官府の許可により、レオポルト・ウールマンから購入された。

1855年、音楽誌『Blätter für Musik』の編集者レオポルト・アレクサンダー・ツェルナーはこう記している：

「われわれの知る限り、スライド・トロンボーンは現在、オペラ劇場でしか演奏されておらず、しかも1本のみである。」補足として：当時、歌劇場管弦楽団の第2トロンボーン奏者であったヨハン・ハフェルは、「スライド・トロンボーンしか扱えず、バルブ付きトロンボーン（Maschinen-Posaune）は扱えない」とされていた。

1862年5月15日、宮内長官府の事務局では、フランス低音調律（ $a' = 435\text{Hz}$ ）への切り替えを正式に採択。これにより、すべての木管・金管楽器の買い替えが必要となった。

当時の背景として：それまで、ウィーン宮廷歌劇場の管楽器奏者たちは、それぞれが自費で高価な楽器を購入し所有しており、しかも自分たちの信頼する楽器製作者から購入していた。したがって、楽器製作者の選定は彼ら自身の判断が大きな影響力を持っていた。

1862年5月16日、マッテオ・サルヴィ歌劇場支配人は、すべての管楽器奏者に次のように通達した：

「自分たちにとって最も適しており、かつ技術的に信頼できる楽器製作者を指名するように。各奏者は、その楽器の製作過程を監督し、自らの考える最高の完成度で納品されるよう責任を持つこと。」

同年5月21日、歌劇場の会議室にて議論がなされ、ヨハン・ハフェルがスライド・トロンボーンしか扱えないため、バルブ付きトロンボーンの購入対象から除外されることが決まる。

1番トロンボーン奏者フランツ・ペックに加え、ペーター・アムスラー、ヨーゼフ・ヴォディツキー、アウグスト・トゥレクが、必要に応じて1番・2番パートを担当するよう契約された。ヨハン・ハフェルは主に2番パートを担当することとされた。

トロンボーンの納入業者は以下の通り：

- ダニエル・マインル（ウィーン）：ペックおよびトゥレクに1本ずつ
- レオポルト・ウールマン：アムスラーおよびヴォディツキーにテナーおよびバストロンボーンを1本ずつ、さらにトゥレクにバストロンボーンを1本

価格比較によれば、アムスラーとヴォディツキーはウールマンから以下を購入：

- B管の4バルブ付きテナー・トロンボーン
- F管の3バルブ付きバス・トロンボーン

また、トゥレクのためにはマインル社製「4つのシリンダー（バルブ）と4つの操作ボタン付きのB管テナー・トロンボーン」が発注された。

1862年10月23日、フランス式低音調律による初のオーケストラリハーサルが、マルシュナー作曲『テンプラーとユダヤの娘』で行われた。

1862年11月4日、フランス式調律と新楽器による初のオペラ公演が行われた（同作品）。

サルヴィ支配人は、楽長デソフの提案を受け入れた。内容は以下の通り：

- スライド・トロンボーン奏者ハフェルはすべてのバレエを担当
- その他のトロンボーン奏者たちはオペラの担当パートを交代で演奏する（ただしハフェルは除く）
- その代わり、ヴォディツキーはバレエの担当から外される

後にオットー・デソフは報告した：

「バストロンボーン奏者ヴォディツキーは、すべてのオペラを演奏しなければならず、過度な負担を強いられている。」

そのため、1864年7月16日、ヨハン・ハフェルにはバレエの演奏任務に加えて、**16作品のオペラ（比較的簡単なもの）**の担当も与えられた。

しかし、1865年8月19日、楽長ハインリヒ・プロホが次のように報告する：

「ハフェルはもはやオペラの演奏には適さない。」

1867年10月22日の文書記録にはこうある：

「ハフェルは長い間バレエの演奏にしか用いられていない。」

彼は1868年4月1日付で年金退職となった。

1880年8月14日、宮廷劇場会計係スタインハウザーは、**オーケストラ再編会議（8月16日）**に向けて、楽長たちに対し、「トロンボーン4本をウールマンに発注する」という議題で通知を出す。

その結果、同月16日、歌劇場事務局はウールマンに対し、**8月18日にハンス・リヒター楽長のもとで、発注相談のために来館するよう依頼。**

ウールマンは8月21日付で、以下の見積書を提出した：

- **4本の広い内径をもつB管トロンボーン**
- **1本のF管トロンボーン**

ただし、1880年10月18日、ウィルヘルム・ヤーンが新たな歌劇場支配人（1881年1月1日就任）に任命され、芸術的決定に関して完全な裁量権を保証された。

4 スライド・トロンボーンの再導入（1883）

1883年1月15日、ウィルヘルム・ヤーン率いるオペラ劇場の運営部門は総監督局（Generalintendanz）に次のように報告した：

「スライド・トロンボーンとマシン・トロンボーン（バルブ付き）の音響効果には、明確な違いがあります。スライド・トロンボーンの音色は、オーケストラにより生き生きとした彩りを与えます。

驚くべきことに、宮廷歌劇場には、スライド・トロンボーンを演奏できる奏者が一人もいません。そのため、当局はトロンボーン奏者トゥレク、メッテンライトナー、シュューカーの年金退職を申請することになりました。」

代わりに、奏者フェルディナント・シュューベルトおよびカール・マリシェクがスライド・トロンボーンの習得に同意した。

トゥレク、メッテンライトナー、シュューカーは、1883年2月28日付で現役を退いた。

1883年1月29日、ヤーン支配人はライプツィヒ市立劇場の楽長アルトゥール・ニキシュに対し、次のように要請した：

「貴殿は当劇場の出身であり、当オーケストラの事情を最も理解している立場として、採用オーディション（Konkurs）の審査と指導をお願いしたい。」

ニキシュは、オーストリア国内ではスライド・トロンボーンの文化がほとんど途絶えていることを踏まえ、最も適任者として迎えられた。

試奏の結果、バス・トロンボーンにはブレスラウ市立劇場の奏者フリッツ・アレックス、テナー・トロンボーンにはベルリンのビルゼ楽団のユリウス・メーリヒを推挙。

ただし、12人の受験者の中に満足のいくアルト・トロンボーン奏者がいなかったため、別途、アルト・トロンボーンの特設オーディションが実施された。その結果、フランクフルト・アム・マインのオットー・ベルトルトが合格した。

スライド・トロンボーンの購入については、以下の楽器製作所に価格見積りを依頼：

- J.C. ペンツェル（ライプツィヒ）
- C.F. シュミット（ベルリン）※ブダペスト国立劇場にも納入実績あり
- F.A. ヘッケル（ドレスデン）

その結果、以下の楽器をペンツェル社（ライプツィヒ）から購入することが決定された：

- アルト・トロンボーン（1本）
- テナー・トロンボーン（1本）
- バス・バルブ付きテナー・トロンボーン（1本）

なお、ペンツェル社は、ウィーンの要求するモデルをサンクトペテルブルクにも納入していた。

ペンツェル社は、**1839年にバストロンボーン（B管スライド式テナー・トロンボーン+クオートバルブ）を発明したザトラーの設計をもとに製作を行っていた。**

さらに、以下の購入も承認された：

- 新任スライド・トロンボーン奏者ユリウス・メーリヒの私有楽器（テナー・トロンボーン+バス・バルブ付き）
- 元バルブ・トロンボーン奏者フェルディナント・シューベルト用の新しいスライド・トロンボーン

しかし、カール・マリシェクは神経疾患のため職務に支障があり、代わってハンガリー国立劇場（ブダペスト）のウィルヘルム・シュヴァーネベルクが採用された。彼は1883年のウィーン歌劇場オーディションで「極めて優れたスライド・トロンボーン奏者」として評価されていた。

その後、シュヴァーネベルクが提供したスライド・トロンボーンの購入も、総監督局により承認された。

1883年4月4日、ウィルヘルム・ヤーンの指揮で上演されたモーツァルト『魔笛』に関して、音楽評論家ルートヴィヒ・シュパイデルは次のように評した：

「再導入されたスライド・トロンボーンは、その色彩的な効果を存分に発揮していた。」

5 再導入されたフランス調律（1885–1886）

1885年、フランス式低音調律の再導入にあたって、全ての管楽器を**新調する必要**が生じた。このとき、以下の楽器がゴーリス（ライプツィヒ近郊）にあるフリードリヒ・シュロット社に発注された：

- E♭管アルト・トロンボーン（2本）
- B管テナー・トロンボーン（3本）
- クオートバルブ付きB管テナー・トロンボーン（2本）

ただし、**当時契約されていたトロンボーン奏者は5名のみ**であり、アルトパートの演奏はテナー奏者の持ち回りとなり、バスパートも同様に交代制で対応していた。

近年、オーケストラのトロンボーン奏者に求められる負荷は**非常に増大していた**。その原因としては：

- 近年のオペラ作品がより大編成で複雑な管弦楽法を要求すること
- リヒャルト・ワーグナーの作品、特に《ニーベルングの指環》の popularity が高まり、上演回数が増えていたこと

6 マーラー時代の演奏事情（1901-1911）

1901年5月22日、トロンボーン奏者の補充のためのオーディション（Posaunenprobenspiel）が実施され、プラハのドイツ国立劇場で首席トロンボーン奏者を務めていたヨハネス・アブレッシャーが採用された。

その直後、オーケストラのトロンボーン奏者たち——ヴァルデ、ヴェセツキー、アブレッシャー——は次のように訴えた：

「私たちが使用しているトロンボーンは、1885年にライプツィヒ近郊のゴーリスにある楽器製作所シュロットで製造されたものです。

1897年に私たちは新しい楽器の支給を求めましたが、当時の楽長フックス氏が『ベル（ラッパ部分）はまだ使える』と判断したため、新品は却下され、**摩耗して気密性を失ったスライド（抜き差し管）部分だけが**、ウィーンの楽器製作師A.デマルによって交換されました。

しかし、それらもすでに再び摩耗し、漏れが生じています。

現在、私たちはラッパ部分がライプツィヒ製、スライド部分がウィーン製という**混成楽器**で演奏しており、これでは真に一体化した（純粋な）楽器とは到底言えません。」

この訴えを受け、**1901年6月14日付の内示**により、総監督局はシュロット社（ゴーリス・ライプツィヒ）から**新しいトロンボーン3本の購入**を承認した。

購入される楽器の内訳は以下のとおり：

- クォートバルブ付きバス・トロンボーン（2本）
- バルブなしテナー・トロンボーン（1本）

1902年9月29日付の承認により、**エミール・ハイネマンのためのテナー・トロンボーン**が追加で発注された。理由は「彼の現在使用中の楽器は非常に不具合が多く、すでに約14年間使用されているため」。

1903年には、**ウィルヘルム・シュヴァーネベルク**および**オットー・ベルトルト**用として、テナー・トロンボーンが1本ずつ支給された。

1904年7月16日からは、**フランツ・ドライヤー**がマンハイム宮廷劇場より首席トロンボーン奏者として採用された。

ドライヤーはすでに1902年、クレーフェルトでの演奏会の際に**グスタフ・マーラー**にその才能を認められ、マーラーからの招聘を受けていた。

ドライヤーは、1904年10月5日付でマーラーに次のように報告した：

「現在、私が使用している職務用トロンボーン（アルトおよびテナー）は、芸術的要求に見合う品質ではありません。

そこで、私が独自に仕様を定めて製作を依頼した2本の楽器（第1奏者用として特別設計）を職務用楽器として購入していただけないか、というお願いを申し上げます。」

この要請を受けて、総監督局は例外的に、ドライヤーがザクセン州アドルフのローベルト・ピアリング社に発注した2本のトロンボーンの購入を承認した。

当時、全契約楽団員には必要な楽器が劇場から貸与されていたが、その際には奏者自身が希望する製作所も最大限尊重されるという運用がなされていた。

1911年11月27日、ドライヤーはオペラ劇場に対し次のように報告した：

「私の現在使用しているトロンボーン（第1パート用）は、もはや求められる性能を満たしていません。特に、高音域での発音が困難になっており、新しい楽器の購入を強く希望いたします。」

それに添付されていたのは、ピアリング社（アドルフ／ザクセン）からの1911年12月19日付注文確認書であり、次のように記されていた：

「B調スライド・トロンボーン（ややシャープ気味）、最高級の金メッキ真鍮製、ガイド付きスライド構造」

作成：文献『Gustav Mahler – Musikinstrumente und Musizierpraxis: Posaunen』（Gerhard Zechmeister著）に基づく

【年表：ウィーンにおけるトロンボーン使用の発展】

年	出来事
1832	ゼークナー親子が「発明的マシン・トロンボーン」で皇帝前に演奏。高評価を得る。
1837	宮廷楽団がウールマンにマシン・トロンボーンを発注。
1845–47	モーリッツ・ゼークナーが臨時団員となり、新型楽器を購入。
1851	トロンボーンは見習い奏者により無償で演奏されていたことが報告される。
1858	4バルブ・バステナー・トロンボーンをウールマンから購入。
1862	フランス低音調律導入。演奏者が自費で選んだ製作家に楽器を発注。
1883	スライド・トロンボーン再導入。ニキシュによるオーディション、ペンツェル社から購入。
1885–86	フランス調律再導入によりシュロット社製の新楽器が導入される。
1901	アプレッシャー採用。旧楽器の問題が訴えられ、再発注が始まる。
1904	フランツ・ドライヤーが採用。マーラーの推薦。ピアリング社へ特注発注。
1911	ドライヤーが再び新楽器を申請、ピアリング社製スライド・トロンボーン導入。